

やっているの、やってみたら?』と言われたので。試しに自転車に乗ってみたら、なかなか快調で、「これならいけるかも」と直感で思いました。

石坂丈一市長 変速機が壊れたときもそうですが、鹿沼さんの気持ちを切り替える力は見事ですね。

特別扱いはしない～負けず嫌いの個性に合っていた家庭での教育

石坂丈一市長 市では、障がいのある児童・生徒の可能性を伸ばすために特別支援教育の充実を図っています。具体的には、特別支援学級に在籍している児童・生徒でも、授業内容によっては通常学級の授業を受けられるようにしています。鹿沼さんも特別支援学級には在籍せず、通常学級の授業を受けられていたそうですね。

鹿沼由理恵さん 授業は常に一番前の席で受けていましたが、ほかはみんなと同じでした。小学校時代は外で遊んでばかりいて、しかも無茶をしていた覚えがあります。一輪車で学校に通ったり、秋は栗拾いをして寄り道をしながら帰ったり。前の人を追いかければ自転車で走れるので、友だちと一緒に自転車で遠出をしたりと。

鹿沼美登利さん 帰りが遅くて怒ったこともありましたが、周りの子も由理恵の障がいのことはさほど気にしていなくて…普通に遊ぶものですから。

鹿沼由理恵さん それがよかったのだと思います。今、学校に障がいがある子がいると思いますが、周りが意識しすぎると本人も意識してしまうので、普通に接してあげてほしいですね。

石坂丈一市長 みんな町田で暮らす人ですから、



鹿沼 由理恵 (かぬま ゆりえ)

1981年5月20日、町田市生まれの35歳。先天性の弱視で、視力は0.04ほど。前方がほとんど見えず、左右から光がわずかに入る程度で日常生活と競技活動に励んでいる。町田第六小学校、町田第二中学校、都立山崎高等学校を経て、筑波技術短期大学、東京都立文京盲学校の専攻科を卒業した。2006年からクロスカントリーを始め、2010年にバンクーバー冬季パラリンピックに出場。その後練習中の事故で左肩を負傷し、2012年に自転車競技に転向。以後パラサイクリングトラック及びロードの世界選手権等において、優勝・入賞など数多くの優秀な成績を収めている。2016年9月リオデジャネイロパラリンピック ロードタイムトライアル 銀メダル獲得。10月町田市市民栄誉彰を授与された。

<パラサイクリング競技 タンデム>

タンデム自転車(2人乗り用の自転車)で競技を行う。前に健常の選手(パイロット)、後ろに視覚障がいの選手(ストーリーカー)が乗る。

障がいがある人も、そうでない人も、同じ場所において同じ体験をすることが大切なのではないのでしょうか。運動会や遠足、修学旅行での交流もそうです。それにしても鹿沼さんは相当やんちゃでしたね。

鹿沼美登利さん やんちゃで、負けず嫌い。ローラースケートやスケートボードも、周りの子と同じようにやっていた。だから、私も一切特別扱いはしませんでした。教育方針というよりも、この子の個性に合った育て方を選択したというのが大きいですね。ハサミや包丁を使う作業も「危ないからダメ」と制限したことはなく、どう使えば危なくないかを考えるように言いました。

石坂丈一市長 そのようなご家庭での教育があったから、タフな鹿沼さんが育ったのでしょうか。

鹿沼由理恵さん 確かに両親の影響は大きかったのですが、同じくらいに大きかったのは地域との関わりです。当時は団地に住んでいて、同じ年くらいの子がたくさんいました。みんなと遊ぶ中で、工夫すれば何でもできることを学んだし、タフさも身についたと思います。

勝っても負けても帰れる町田がある

石坂丈一市長 お母様によれば、負けず嫌いということですし、ミス・ストイックというニックネームがあるように、困難に負けない不屈の人というイメージがありますが、くじけそうになることもあるのではないですか?

鹿沼由理恵さん あります。子どもの頃もそうでしたし、今も。そんなときは、食べて、寝て、忘れま。でもとにかく、止まりたくはないんです。前でも後ろでも少しでも動いていれば、いつかは前に進むのではないかなと思うんです。実はリオパラリンピックの4か月前に右手の神経を痛めてしまい、腕が不自由な状態でレースに挑みました。気持ちは崩れかけました。でも、周りの方が必死にサポートして下さって、進むしかない、止まっちゃダメだと思いました。

石坂丈一市長 鹿沼さんには、こちらが応援したくなる魅力というか、馬力のようなものがありますね。こちらがポンと背中を押したら、どんどん前に突き進んで行っちゃうような。だから私も、一生懸命応援したくなるんです。帰国後に手術を受け、昨年末はリハビリに専念されたようですが、そろそろ練習再開ですか?

鹿沼由理恵さん ランニングからはじめる予定です。町田市内では高ヶ坂から本町田に抜けて、金井方面に出た後薬師池公園を走って、七国山から山崎高等学校の裏を走って、戦車道路を走って帰ってくるのがいつものコースです。

石坂丈一市長 20キロ以上はありますね。今も町田でトレーニングをしている鹿沼さんですが、町田にはたくさん思いが詰まっているのですね。

鹿沼由理恵さん 勝ったら喜んで下さる方がいて、でも負けても帰って来られる場所がある。そのことが闘志にも力にもなります。

障がいのある人もない人もスポーツでまちを一つに

石坂丈一市長 いよいよ、2020年東京オリンピック・パラリンピックが目前に見えてきました。

鹿沼由理恵さん 次は金を狙う気持ちやコンディションでなければ、出場する意義はないと思っているので、自分自身を見極めた上



で出場を目指すのかどうかを決めたいと思っています。

石坂丈一市長 市では、2020年の東京大会に向けた取り組みを既に開始しています。2016年度にキャンプ地招致に向けて、オリンピック・パラリンピックの組織委員会に対し、国際基準に合った市の施設の登録を行いました。また、昨年6月に、南アフリカ共和国をホストタウンに登録しました。11月にはブラインドサッカーのドリームマッチを市内で開催しています。今年1月から2月にかけては、パラバドミントンのインドネシア代表合宿と日本代表の候補者合宿を行います。また、9月には市立総合体育館で「パラバドミントン国際大会2017」を開催する予定です。パラリンピックを盛り上げるのも町田市の大切なテーマですから、いろいろな方法で大いにPRしていきます。

鹿沼由理恵さん 私も競技活動の他に、2017年はスポーツの楽しさや厳しさ、そしてパラリンピックの魅力がたくさんの方々に伝える活動を、もっとしていきたいと思っています。

石坂丈一市長 「スポーツのまち まちだ」も鹿沼さんと同じで、止まったらダメ。新しい企画にチャレンジして、パワーアップしていかなければなりません。2017年は、パラリンピック種目の体験イベントも開催する予定です。自分で体験すると、ますます競技の魅力が実感できます。市民の皆さんには、ぜひ競技を観戦したり、体験イベントに参加したりしていただきたいですね。

今日はありがとうございました。

